

## 博士學位論文審査要旨

申請者 小川 史（教育学研究科博士後期課程5年）

論文題目 1940年代素人演劇史論 - 表現活動の教育的意義 -

主査	早稲田大学教育学部教授	博士（教育学）	小林敦子
副査	早稲田大学教育学部教授	博士（文学）	朝倉征夫
副査	早稲田大学教育学部教授		矢口徹也
副査	早稲田大学教育学部助教授	博士（教育学）	坂内夏子
副査	明星大学人文学部教授		甲斐規雄

### 1、本論文の目的、趣旨

本論文の目的は、民衆の演劇活動が社会教育の観点から見ていかなる意味を有するのかを、歴史的文脈から検討することにある。具体的には、1940年代に全国的に広がりを見せた「素人演劇」が考察の対象として設定されている。

1940年代は、日本が戦前の国家総動員体制から戦後の民主主義社会にかけて大きく変貌を遂げた激動の時代であった。それと同時に、1940年代は、近代日本史上、未曾有の形で演劇活動が広がり、とりわけ素人演劇という民衆演劇が大きく発展を遂げた時期でもある。

ここでいう素人演劇とは、職業演劇以外の一般民衆による演劇であり、かつ近代演劇に即し写実的な手法で日常生活を描写している演劇活動を指す。素人演劇という名称は、国家総動員体制の確立という国策の一環として1940年代前半に大政翼賛会が推進した「素人演劇運動」の中で用いられ定着していった。

こうした素人演劇活動は、1945年の終戦を境として、前半の戦争遂行と全体主義、後半の平和の実現を目的とする、まったく逆に見える政治状況下で、それぞれの時代性を色濃く反映しながら展開した。

従って、本論文は、素人演劇という社会教育活動が、戦前、戦後を通じての1940年代という転換期の中でどのような意味を持ったのかを土台として、民衆の演劇活動が近代日本社会教育史において、どのような役割を果たしたのかを考察することを目的としている。

演劇は、社会教育の固有の分野である民衆文化活動の重要な一構成要素である。それにも関わらず、演劇に関する社会教育からの体系的な研究は、極めて限られたものであった。とりわけ本論文で取り上げた素人演劇活動の歴史的検討は、社会教育の分野では大きな課題として残されてきたものである。本論文はこの点で、素人演劇に対する社会教育研究の第1歩を期すものである。

一般に素人演劇活動は、集団で行うこと、上演に到るまでのプロセスが自分たちの力で行われること、舞台上で民衆の生活が再現されること、観客に対しても大きな感化力があることなどの特性から、教育的意味を持っており、ここに、素人演劇活動の独自性があると考えられる。しかし、どのような点に教育的な意義があるかについては、これまで十分な検討がなされてきたとは言えない。本論文では、素人演劇という表現活動の教育的意義についても、合わせて検討を試みている。

本論の分析は、以下の2点においても特徴的である。第1に、1940年代における素人演劇を、国家の文化政策や教育政策との関連で検討しようとしている点、第2に、素人演劇の基本的段階である集団の組織化、脚本の作成、稽古、上演、観劇を分析している点である。これまでの社会教育の先行研究においては、演劇が、絵画や音楽といった同じ表現活動として捉えられる傾向にあり、演劇独自の表現のあり方に十分な注意が払われてこなかった。そのため、本論は演劇の独自性を考慮して、素人演劇の基本的段階の一連のプロセスを取り上げ分析している。

## 2、本論文の構成

本論文は、主に2本の柱から成っている。第1の柱は、1940年代前半であり、第2の柱は1940年代後半である。第1の柱では、日中戦争以後の総動員体制の確立という流れの下で、国家の文化政策と関連づけながら、素人演劇の展開が論じられている。民衆の意識を変革し国民を統合するために有効な方策として政府が演劇を認識し、そのため模範的な行為を民衆に提示するものとして、素人演劇運動が始まったことが考察されている。また宮原誠一等、社会教育論者の系譜に沿いながら、素人演劇活動を社会教育史の文脈の中に、体系的に位置づけようとしている。

第2の柱では、終戦後、青年団や労働組合などを中心に農村においても都市部においても演劇活動が全国的に活発化したことが実証的に検討されている。またこの時期に民衆は演劇という表現手段によって社会の本質を見つめ、新たな人間関係・社会関係の模索をしていたことが論じられ、素人演劇の社会教育史上の意味が考察されている。

本論文は第1章から第7章で構成されている。第1章では前史にあたる1910-1930年代、第2章から第4章までは1940年代前半の演劇活動が論じられ、第1の柱を構成している。第5章から第7章までは1940年代後半の事柄について論じており、第2の柱をなしている。

目次は以下のとおりである。

## 目次

### 序論

- 1 研究の課題と意義
- 2 素人演劇の位置づけ
- 3 先行研究及び資料
- 4 本論文の構成

### 本論

#### 第1章 素人演劇の前史

- 第1節 地域への新劇の波
- 第2節 坪内逍遙の公共劇
- 第3節 素人演劇の脚本分析

#### 第2章 戦時下における素人演劇運動 - 自発性をめぐる総動員体制のジレンマ -

- 第1節 素人演劇運動の誕生
- 第2節 演劇行政の展開
- 第3節 素人演劇運動の展開

### 第3章 素人演劇運動の理論

- 第1節 理論の概要
- 第2節 生活協同化の促進
- 第3節 生活感情の表現

### 第4章 戦時下素人演劇運動の実際－国家統合に向けた教育と訓練の場としての演劇－

- 第1節 地域における素人演劇の実態
- 第2節 素人演劇の脚本に見る「新体制」の提示
- 第3節 素人演劇の指導と練習過程
- 第4節 上演における統合の様態

### 第5章 終戦直後の素人演劇と表現の獲得

- 第1節 敗戦をめぐる経験の差異
- 第2節 終戦直後の風景
- 第3節 民衆の精神的危機と演芸
- 第4節 農村における演劇活動－表現の獲得－

### 第6章 終戦直後における労働者の素人演劇 - 自立演劇の展開過程 -

- 第1節 自立演劇をめぐる教育的な問題状況
- 第2節 自立演劇の成長と転換
- 第3節 自立演劇の自立性

### 第7章 演劇表現を通じた関係性への問いかけ - 労働者による自立演劇の実践 -

- 第1節 労働者にとっての経験と表現
- 第2節 自立演劇の指導をめぐる問題
- 第3節 日常性と関係のとらえなおし

## 結論

### 3、各章の概要と論評

#### 第1章 素人演劇の前史

本章は、本論文全体のなかでは前史の位置を占めるものである。時代としては明治後半の1910年代から1930年代終盤までの演劇活動が取り上げられている。この時期は演劇活動の勃興から、権力による抑圧までの時期にあたる。

本章では、日本の近代劇である新劇の誕生と展開、大正期の民衆芸術論争、坪内逍遙に

よる「公共劇」の理論と活動、そしてプロレタリア演劇運動を検討している。そしてそれらの諸活動が民衆の中に、次第に演劇という行為を持ち込んでいった状況を論じている。

こうした演劇活動は相互に複雑な絡みあいを見せるが、素人演劇にとって大局的に見れば特に重要なのが、坪内逍遙が主唱した「公共劇」の潮流と、プロレタリア演劇の潮流であることを、著者は指摘している。前者は演劇活動における協力関係に力点を置き、あらゆる人々が参加し協力する演劇を構想していた。それに対して、後者はプロレタリアートを活動の主体とした、階級闘争の一環としての演劇を構想している。各地域でそれぞれの特性を持った演劇活動が起こったが、双方ともに、民衆の素人演劇活動に影響を与えたことを、本章では実証的に論じた。

また時代の推移と戦局の悪化に伴い、プロレタリア演劇は弾圧される。他方、「公共劇」の特徴を持った演劇活動は、ある場合には弾圧され、ある場合には戦時体制に同調するような民族主義的な活動に変質したと、著者は結論づけている。

## 第2章 戦時下における素人演劇運動 - 自発性をめぐる総動員体制のジレンマ -

本章では、日本が国家総動員体制に突入する中で、文化政策としての素人演劇運動が出現してくる状況が詳細に検討されている。

国家総動員体制において本質的な問題となっていたのは、第1に、いかにして民衆が自発的に戦時体制に協力するように働きかけるかということと、第2に、いかにして民衆の労働力を計画的に維持・再生産するか、ということであったと著者は論じる。

しかし国家総動員体制の下で、職業の無理な改変が行われた結果、勤労意欲が低下し青少年の不良化が問題となっていたが、天皇制イデオロギーによる教化では対処できなかった。また民衆の精神は疲弊しており、それを克服するものとして、新たなる文化が求められたという時代背景が、まず本章では明らかにされている。

こうしたなかで、産業報国会や協会などの各種団体によって素人演劇運動が推進されてゆく。これら各種団体は、演劇活動を楽しみながら民衆の「自発性」を引き出すものと位置づけ、結果的には労働力の再生産にも資する活動として捉えた。したがって、演劇活動を民衆に広めることは、国家総動員体制を維持するための方策の一つとして、かなりの有効性を持つと考えられたのであり、そうした考えに基づいて実際に運動が起こされ、素人演劇の活動が認められるようになったと著者は論じている。こうして演劇が政策的に導入されていく背景を、本章では解き明かしている。

具体的には農村文化指導者講習会の開催、農村厚生演劇隊の結成、農文協映画・演劇・紙芝居の普及、日本移動演劇連盟の発足と職業劇団員の巡業という一連の動きがこの時期に一挙に動き始めたという。

このように素人演劇運動は文化政策の中でも大きな位置を占めるようになり、法整備までもが考慮されることとなる。だが、結局の所、この運動は官製の性格を脱却できず、民衆の「自発性」を喚起するという目的の達成にまでは至らなかったと、著者は論じている。つまり素人演劇は自発性により強く力点を置くが、これは常に教化的な傾向との矛盾に行き当たっていたと本章では結論付けている。

## 第3章 素人演劇運動の理論

本章では、素人演劇運動を支えた理論に対して、考察を加えている。

当時はまだ、演劇を行うことに対して多くの者が抵抗感を持っていた時代であり、演劇は卑俗な娯楽という一般通念が支配的であった。そうしたなかで、素人演劇運動の推進者にとって、演劇の価値を認めることと、それが総動員体制のなかでなぜ必要なのかを正当化することが課題であったとして、著者はこの時期の議論を客観的に考察している。

まず、著者は、当時の論者が理論化する際、大きなよりどころとなったのは、主として大河内一男らの経済学者によって展開されていた、失われた労働力が娯楽を通して再び生産されるという考えであり、この考えを摂取しつつ、「素人演劇運動」の理論家は各自の理論を展開した、と指摘する。

また本章では、戦後、社会教育の世界で一環して指導的立場に立ち続けた宮原誠一、さらに演劇学者である飯塚友一郎の論考を検討し、当時の論者が総動員体制の下で演劇を通じて民衆の統合をいかに図るかを理論化しようとしていたことが、明らかにされている。具体的には民衆演劇の教育性として、生活の協同化、生活感情の表現、生活訓練の場ということが指摘され模索されていたことを、著者は論じている。

#### 第4章 戦時下素人演劇運動の実際 - 国家統合に向けた教育と訓練の場としての演劇 -

本章では、素人演劇運動として行われた活動が実際にどのようなものであったかを、香川、長野などの事例に則して脚本や上演形態などから実証的に検討している。

素人演劇運動の大きな目的は、民衆の自発性を喚起し、それを国策に沿ったものへと方向付けることであった。当時、民衆のあいだで好まれていたのはいわゆる股旅物のような大衆演劇であり、また、農村では農村歌舞伎や民間芸能の人気が高かった。素人演劇運動を振興するには、新たな演劇へと民衆の関心を向けることが鍵となり、民衆にとって親しめるものである必要がある。そのため、多くの作家が素人演劇の脚本を書き、さらには農民や労働者から脚本を公募し、それが雑誌上に掲載されたことを、著者は指摘する。

本章では、戦時下の素人演劇運動の実際が具体的に検討されることで、演劇活動が、国家統合に向けた教育と訓練の場として位置づけられていたことが、解明されている。

だが実際には民衆の嗜好に合った新たな演劇を作り上げることは容易ではなかった。特に、戦時下の強力な検閲によって自由な創作ができなかったこと、上演の際に数々の儀礼を強制されたことは最大の問題であった。また脚本は、葛藤のない世界を描いており、民衆の意識や感情を反映できなかったとの解釈を著者は提示している。こうして、自発性の喚起を目指した素人演劇運動は、その目的を達成できずに終わったと、著者は結論づけているが、その論旨には十分な説得力がある。

ただし、この時期の演劇政策によって、職業演劇の人々が組織化され移動演劇が各地を巡回したことによって、多くの民衆が農村歌舞伎や旅回りの大衆演劇ではない近代演劇に初めてふれ、これが戦後の時代への流れを作り始めたことに著者は注目している。

#### 第5章 終戦直後の素人演劇と表現の獲得

本章では、終戦直後の民衆の精神状況を検討し、その中から民衆自身による素人演劇活動が澎湃として起こってくる様子を分析している。

まず 1940 年代前半に試みられた素人演劇運動が民衆の「自発性」を政策的に喚起しよう

としたのとは異なり、終戦直後に日本全国各地で盛んにおこなわれた素人演劇活動は、自然発生的に生まれたものであり、民衆の内発的な欲求に基づくものであったと、著者はまず指摘する。

次に、兵隊の復員や終戦直後の解放感、さらに経済的な立ち直りの中で、浪花節などを中心とする演芸大会が澎湃として起こり全国各地で開催されていく。しかし次第に演芸に飽き足らない、新時代の文化を渴望する青年層を中心に、新劇の活動が行われ始める。ある意味で、敗戦後の精神的疲弊やアイデンティティの危機から、人々は素人演劇という表現活動を通じてエトスの発露を求めらるようになっていくのであり、こうした時代背景が本章では浮き彫りにされている。

この演芸から新劇活動への移行を支持したのが当時の劇壇であり、劇壇の人々は、社会の民主主義化を推進するという目的の下、そのような社会にふさわしい形態の演劇活動を推奨したことが明らかにされている。こうして、民衆の自発的な表現を求める活動と劇壇の動向が相まって、農村・工場の青年を中心とする新劇活動が積極的に展開され素人演劇活動が全国各地を席卷したと、著者は論じている。

また、本章では、封建的で閉塞的な人間関係の中で、ものを言えなかった青年層が、素人演劇を通じて、ものを言う練習をし、自分の言葉を豊かにすることで、村においても自分の意見を主張できるようになり、変革の担い手として成長を遂げていったことが、具体的な事例に則して明らかにされている。さらにこの時期に農村でおこなわれた演劇では、封建制の打破や農村での青年の生き方が積極的に取り上げられ、社会教育活動としての性格を色濃く帯びたものとなっていたことも考察されている。

このように著者は演劇活動を通じて、青年層が社会的に言葉を獲得し論理を組み立て、自分の存在を公の場に示していく道筋を、各地の実践を踏まえた上で鋭く分析しており、演劇は民主主義の訓練となったことを、克明に明らかにしている。

## 第6章 終戦直後における労働者の素人演劇 - 自立演劇の展開過程 -

本章では、終戦直後に盛んになった素人演劇のなかでも、特に労働者の自立演劇を取り上げ、当時の労働運動など時代状況と関連づけながら丁寧に検討を行っている。自立演劇とは、労働者の自主的な演劇活動を指しているが、戦後に目立った活動が展開されるようになった。

著者は、戦後の自立演劇は、新劇関係者が中心となって指導した各職場の労働組合の文化部や青年団の演劇部などを基盤としていたことを論じている。また共産党系の新演劇人協会の指導もあり、多くの演劇団体・サークルが生まれ、東京自立劇団協議会が結成されたこと、さらに自立演劇コンクールが開催され、機運が高まったことが指摘されている。

さらに自立演劇活動を支えたのは新劇の関係者であり、彼らによる指導はあったが、労働者が彼らの指導に全面的に従っていたわけではないと、著者は新しい角度から論じている。つまり職業演劇の関係者は場合によっては指導する立場の行き過ぎによって、自立演劇の人々との間に確執を作ることにもなったという。そして自立演劇の関係者が、自分たちの経験を尊重しそれを共有することで、演劇については経験の深い新劇の関係者に対峙し得るまでに成長していたことに、著者は注目するのである。このように著者は自立演劇が職業演劇から自立性を持ったものであることを、実証的に明らかにしており、興味深い

論考となっている。

当時、素人演劇を通じて、観客と舞台との気のおけない交流があった。これは観客と舞台の演じ手とが、日常生活において経験を共有し、労働者が当時置かれていた状況の中で互いの感情を分かち合うことで生まれたものであると、考察が加えられている。しかし、書かれた脚本の数が少なかったことは問題であったことを、著者は論じている。

こうした自立演劇の盛り上がりは 1947 年の全東京自立演劇コンクールで最高潮を迎える。ただし、労働組合運動との緊密な連携の下に自立演劇活動が展開されたため、GHQ の占領政策転換によるレッドパージの影響などで、1950 年までに自立演劇は壊滅状態に陥ったことが、本章では具体的に明らかにされている。

## 第 7 章 演劇表現を通じた関係性への問いかけ - 労働者による自立演劇の実践 -

本章では、自立演劇の具体的な活動内容や脚本を検討し、演劇という表現活動を通じて、労働者が自らのあり方を問い直していくプロセスが考察されている。

自立演劇の活動の中では、多くの場合、既成の脚本が再構成されて上演された。しかし相応しい脚本が見つからない場合、労働者は自分達の生き方に合うような演劇の脚本を求め、またみずから書くことになったという。

その際、労働者は積極的に自らの生活を描き、生活に内在する矛盾を掘りおこそうと試みた。さらに労働者が直面する様々な問題を、労働者自らが演劇によって表現し、それを観た職場の同僚の労働者が自分の生活を振り返るという過程は、労働者が自分たちの経験を深化させてゆくプロセスでもあったと、著者は論じている。

自立演劇運動は、一般的に労働組合運動との関係の中で論じられ、政治的に先鋭なものであったというように理解されている。しかしながら、著者は、脚本の分析から、演劇の内容は必ずしも政治的な目的のためだけではなく、生活感覚に根付いたものであったことを、明らかにしている。たとえば著者は、労働組合の活動を描いた脚本においても、単に組合闘争を演劇で示しただけでなく、闘争の結果、自分を取り巻く人間関係にもたらされる影響にまで踏み込んで表現していることに注目している。

また、脚本の分析から著者は、自立演劇においては、労働現場に限られない親子や夫婦関係を問い直す試みがされており、とくに男性と女性の自立した関係にまで立ち入った表現がされているとする。つまり演劇という表現活動を通じて、民主主義の下における新しい人間関係のあり方が模索されていたことを、著者は指摘している。

こうして本章においては、自立演劇運動に参加した労働者が、演劇の表現活動を通して自らの身体や言葉のあり方を内省的に見つめ直し、人間相互の関係性を問い直そうとしていること、その意味で労働者の演劇活動は、社会教育活動としても優れたものとなっていることが脚本の分析から明らかにされており、論者の実証的研究の冴えを見せている。

本章では、著者自身が脚本を発掘し、こうした脚本に依拠しつつ議論を展開している。こうした脚本は、社会教育史の歴史的資料としても価値があるものと思われ、脚本の分析によって、当時の演劇の実態やその目指した所が具体的に伝わってくるものである。

## 4、総評

以上、本論文の目的、構成、各章の概要およびそれらへの論評をおこなってきたが、総

評としてまとめれば次のようになる。

(1) 本論文は、1940年代に展開された素人演劇運動を考察の対象として設定し、民衆の素人演劇運動の社会教育的な意味を考察しようとしたものである。つまり太平洋戦争の終結を境に大きな転換期を形成した1940年代において、素人演劇がどのような形で起こり、以降にどのような影響をあたえたのかを本論文は具体的、かつ説得的に明らかにしている。

民衆の文化活動は社会教育の固有の領域であり、民衆の文化活動の中でも素人演劇は、民衆のエートスの発露であり、民衆は素人演劇を通じて自己表現し、社会の本質を見つめていったという意味で、社会教育の重要な一翼を担うものと考えることができる。しかしながら、この分野の研究は十分なものではなく、本研究は社会教育学における研究上の空白を埋めるものである。

さらに素人演劇は、戦後の青年団の活動や、生活記録といった豊かな自己表現、あるいは共同学習といった優れたグループ活動と互いに響きあって、戦後社会教育の揺籃期を形成しているが、この時期の先行研究は少なく注目できる。

本論文は、素人演劇に固有の教育的な意味を明らかにしようとして、演劇の基本的段階である集団の組織化、脚本の作成、稽古、上演、観劇にまで踏み込んで一連のプロセスを分析した点でも特徴的である。特に台本やシナリオ、あるいは演出や演技の方法や脚本の読み方などが書かれている素人演劇の入門書などの一次資料を発掘して、実証的に論じている所は特筆すべきであろう。

(2) 1940年代前半の総動員体制の下で、民衆動員的手段として、あるいは精神的に疲弊していた民衆の精神的支柱として、新しい文化の創出が求められていた。こうした流れの中で、素人演劇運動が展開された。しかし、政府による思想統制下で民衆の「自発性」の喚起は、本来的に矛盾を内包していたと、著者は論じる。また脚本の分析から、演劇活動においても、民衆の意識や感情を反映できなかったことが本論文では具体的に明らかにされている。そのため、素人演劇運動は、期待された目的を達成することができず頓挫したと、著者は結論づけている。

一方、1940年代の後半、素人演劇活動は、日本の近代史上、未曾有の広がりを持つことになったが、こうした盛り上がりは、1940年代前半の動きなくしては考えられないことであつたと著者は指摘する。

ただし終戦直後に日本全国各地で盛んにおこなわれた素人演劇活動は、1940年代前半に試みられた素人演劇運動が民衆の「自発性」を政策的に喚起しようとしたのとは異なり、自然発生的に生まれたものであり、民衆の内的な欲求の発露であつたことを著者は明確に指摘する。また1945年以前は、象徴表現やリズムで情動や無意識に訴えることが素人演劇の目的であり、政府は民衆演劇を支配の道具として手段化した。それに対して、戦後の素人演劇においては、民衆の意識に働きかけることで変革を促そうとし、民衆は主体的に演劇による表現を獲得していった。こうした素人演劇の大きな転換を、本論文では実証的に証明した。

終戦直後に盛んになった素人演劇のなかでも、著者は特に労働者の自立演劇を取り上げ、演劇という表現活動を通じて、民主主義の下における新しい人間関係のあり方が模索されていたことを論じている。自立演劇運動に参加した労働者は、演劇という自己表現によって自らの生活を振り返り、身体や言葉のあり方を内省的に見つめ直しており、労働者の演



劇活動は、生活感覚に根付き、教育活動としても優れたものとなっていることが具体的に考察されている。

このように 1945 年を境に、素人演劇の性格は鮮やかに転換していくが、1940 年代を通じて一環して、素人演劇と政治との関係が濃厚であったこと、素人演劇活動が参加者に協力しあう経験を持たせ民衆を統合する役割を果たしたことも、本論の記述から浮かび上がってくる。このように本論文は、近代日本社会教育史にとっての民衆の演劇活動の意味を明かす上で、貴重な論点を提起していると考えられる。

(3) 本研究に対しては若干の問題点が指摘される。それらの指摘をまとめるならば、以下のようになる。

論文の限界としては、第 1 に、素人演劇という活動を論じるに当たって、文字資料に依拠せざるを得なかった点が挙げられる。素人演劇は、本来的に生きた言葉と身体を介在とする表現活動である。しかし著者が文字資料に依拠せざるを得なかったために、演劇という表現活動の分析にもかわらず、若干の違和感を感じざるをえない。

今後は、当時の関係者の聞き取りなどをより豊富にすることで、実態をよりリアルに明らかにし、素人の表現活動の社会教育における意味の探求を一層進めることが可能と考えられる。

第 2 に、当時の農村においては、青年を中心に活発な素人演劇が展開されていたが、本論では労働者の活動が中心となり、農村での素人演劇活動の探求が今一步であることを指摘できる。

しかし、これらの課題は本論文の価値を減じるものではなく、今後の研究課題として位置づけられるものである。著者の研究意欲と精緻な研究手法、整合性のある論理的展開は評価すべきであり、テーマに即した研究の成果があがることを期待したい。

以上の諸点から総合的に判断して、審査員一同、本論文が博士(教育学)に値するという結論に達したので、ここに報告する。